さんけん新聞

発　行
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046

改装工事着々　ビジターセンター5月3日オープン

三段峡ホテル向かい側の建物に開設するビジターセンターのオープンが５月３日に決まり、改装工事が順調に進んでいる。博物展示のほか、カフェブースなどを予定している。12月には滋賀、京都の先進施設を視察し、アイディアを持ち帰った。センターの運営はさんけん、コンセプトは「三段峡を深く楽しめるための入り口」。工事の進捗や情報は専用インスタグラムで発信する。

博物展示、カフェなど予定

先進施設を視察　SNSで発信

改装工事が進むビジターセンター

二月からは参加者を募ってＤＩＹによる塗装とタイル張り作業をし、展示物を設置する。五月三日のオープニングイベントは、昨年開催した「日本茶カフェ」などを企画している。七日まではスタッフが常駐し、その後は無人での開放や実情に合わせて開館する。

運営情報収集のため十二月十七日から三日間、広大さんけん部と本宮炎理事長らが、滋賀県立琵琶湖博物館、個人運営の水族館「琵琶湖ベース」、標本などを販売する京都の「ウサギノネドコ」、環境教育ＮＰＯ法人が運営する「法然寺森のセンター」など六施設を視察した。

センターのコンセプトは「三段峡を深く楽しめるための入り口」とし、キャッチフレーズに「三段峡野外博物館に出かけよう」を予定している。楽しみながら歩き、魅力を味わってもらうのが狙い。「真正面から三段峡の価値を高めるのが、さんけんの地域貢献」と本宮理事長は期待を込める。

【ビジターセンター専用インスタグラムアカウント】
www.instagram.com/sandankyo_visitorcenter/

テーマ「シン・さんけん」資金調達・スタッフ増が課題

本宮理事長「一段上の組織運営必須に」

本宮炎理事長

今年のテーマは「シン・さんけん」とした。新たなスタッフの参加やビジターセンターの開業が予定されていて、これまでより一段上の組織運営が必須になった。資金調達も課題であり、理事会の役割が大きくなっている。理事やさんけんメンバーのコミュニケーションが一層重要だと考える。

昨年はビジターセンター事業やツアーの販売が始まり、環境調査や探勝路清掃活動が評価され、取り組みの結実を感じた。しかし、事業拡大や多角化のため、かねてから懸念していた人手不足が顕在化する。スタッフの増員は待ったなしだ。

2023年の主な事業計画

ビジターセンター　軌道へ

ビジターセンターのブランド価値向上を最重要事業に位置付けて博物展示の完成、三段峡講座やカフェを試験運用、グッズ開発などに取り組む。安芸太田町へ地域おこし協力隊員の派遣を要請する。

「自然塾」講師育成に重点

企業の支援が終了する「さんけん自然塾」を自立運営する。中高生の講師育成に重点を置き、上野吉雄さんや広大さんけん部の指導を受け、環境調査技術の習得や論文の執筆などに挑戦する。

希少動物保全活動を組織

２企業の助成事業でオオサンショウウオを中心にした河川調査、ヤマセミの保全活動を実施する。前者は加計高校と連携、後者は「さんけんヤマセミ部」を立ち上げ、愛鳥家グループを形成する。

人材育成へ百三十三万円交付

県の「企業版ふるさと納税」事業

広島県が所管する企業版ふるさと納税の「ひろしま版里山エコシステム事業」へ外資系二社が納税し、県からさんけんに対し事業補助金として百三十三万円が交付された。企業は税額控除を受けられる。

同事業は中山間地域で活動する団体を支援する仕組みで、さんけんへの交付対象は人材育成事業。自然塾の運営やフィールドワーカーの育成に使われる。

企業版ふるさと納税を活用した同様の仕組みは全国初、さんけんが支援対象団体第一号になった。

瀬戸内クラファン

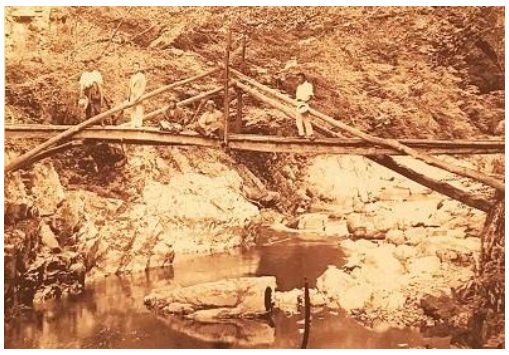
四万三三一円集まる

インターネットラジオのせとふくラジオが企画した「瀬戸内クラファン」で、さんけん自然塾が使用するライフジャケットの購入費に充てる四万三三一円が、期間中の十二月二十四日までに集まった。三段峡ホテルの栗栖汐音さんが、日頃から撮影した三段峡の写真を販売する形で進められた。

一口メモ

▼命名百年

今年は「三段峡」と名付けられて百年目を迎える。熊南峰入峡から六年経っていた。地元では「悪谷」とまで言われる自然厳しい地として知られていた。一九二三年八月、三段峡保勝会が設立され名勝申請をした。十一月には内務省史蹟天然物調査委員の国府犀東一行が入峡、このとき「三段峡」の名が確定した。考案したのは南峰だが、犀東を名付け親とした。



セピア寫眞帖（2）

何とも心許ない「奇橋龍眠を渡り」

竜門の淵の下流に架かっていた木橋である。現在は写真の手前、上流側に鉄製の吊り橋「竜門橋」がある。

両岸に細長い木を突っ張って縄で結び、中央部の垂直の柱で橋桁を吊って固定している。三角形を組み合わせる強固なトラス構造だが、何とも心許ない。トラス橋は十六世紀ごろから欧州で普及した。重機があっても入れない現場、どうやって組んだのか興味深い。

昭和初期の資料に「奇橋龍眠を渡り」との記載があり、この橋を指すと思われる。龍が眠るとはロマン溢れる名前だが由来は不明。奇橋とあるが、この地では珍しい形だったのだろう。

撮影は前回に続き野田富示仁である。写真技師の熊南峰の影響を受け、カメラを始めた。原版の多くは原爆で失われたが、六十年以上経って約二千枚のガラス乾板が野田家の倉で見つかった。修復後、二〇〇三年発刊の「芸北、カメラが語る昭和初期」に一部が発表された。そのうちの一枚である。今後、未発表の写真を紹介する。（松尾俊孝）